

18.身の丈を超えないで、身のほどで生きる

1994年、ダイヤモンド社から「身のほど経営のすすめ」というタイトルで出版して頂いた。サブタイトルは「小さな会社が元気で生きる」とした。日本アイアール社を創立して「20周年記念」の意味合いもあった。当社のことが少しでも宣伝できればという下心もあった。それから28年、特許公報の電子化という大きな変化の波に飲み込まれ、これまでのビジネスモデルが一気に崩壊した。それでもどうにか、しぶとく生き抜いて来られた。感謝、感謝である。

経営者には幾つかのタイプがあるという。ひとつは会社を大きく発展させ、社員をたくさん雇い、社会に役立つ商品をたくさん生産し、市場に出して感謝されることで、会社の存在感を高めていく経営者。もうひとつは、自分が持っている技(ワザ)や感性に拘りながら物づくりする職人技を大事にする経営者。このような経営者は、発明くんの憧れでありに尊敬している。しかし残念ながら発明くんには、この才能は持ち合わせていない。

しかし、経営能力は無くても発明くんが戒めとしているのは、中国古典「菜根譚(著書:洪自誠)で述べられている「徳は事業の基(もと)なり」である。徳を持った企業であれば、事業も永続的に上手く行くということを「菜根譚」は説いている。基(もと)、基礎とは他人への礼儀や思いやりである。これだけは守りたい。

高度経済成長期の前は、多くの国民が貧しかったから、志や夢が大きな支えとなった。しかし貧しくても惨めさはなかった。高度経済成長期は、利益の配分も上手くいき、そのお陰で国民の多くが豊かさを享受してきた。また、大きい会社が無条件に高く評価されていた。しかし、いまや頼れるべき大企業は倒産、合併、リストラ等で「大きい事は良いことだ」の神話が崩壊している。会社経営の効率化に伴い犠牲者も出している。

日本アイアールは小さな会社であるが、生き抜いていかねばならない。会社の評価は会社が大きいとか小さいとかでなく、市場や取引先のニーズ(市場要求)に対応できる能力があるか否かで、評価されるべきだと考えている。有難いことに知財業界のお客様は、品質にはうるさいが、取引する相手(外注先)が大きいとか小さいとかは、あまり気にしていない。